

オールドデリーの活気あるナイトライフ、キャロムクラブの掟

マノージ・シャルマ

2017年8月8日 午前08時15分 ヒンドゥスタン・タイムズ 投稿

キャロムクラブの数は年々減少しているが、オールドデリーには、バリマラン、ラール・クアン、マティア・マハルといった地域の地下室、店舗、リビングで営業するキャロムクラブがまだまだたくさんある。これらのクラブのほとんどは深夜 2 時まで営業していて、オールドデリーの活気あるナイトライフには欠かせない存在となっている。



アルシャド・ミルザ（右）が経営するミルザ・クラブは、ジャマ・マスジドに近いパハディ・ボージュラ地区のバダ・マカンとして有名なハベリの 1 階のリビングルームにある。

モハマド・ショアイブの顔は、木製ボードの上にワイヤーで吊るされた半円形の金属製天蓋付きの電球が放つオレンジ色の光に照らされながら、次のゲームの準備をしている。



オールドデリーのキャロムクラブでは、州や国レベルのチャンピオンを何人も輩出している。

すでに彼はブラッシュ・ショットやファイン・グランズを使っていた。次はボム・ショットを使うと宣言した。彼の指がストライカーを弾くと、3枚の黒色コインがポケットへ飛び込んだ。すると、ジャマ・マスジッド近くの路地裏にある低い天井の部屋に詰め込まれた緊張感は、大歓声の中に消え去った。

オールドデリーのキャロムクラブのエキサイティングな世界へようこそ。

城郭都市の狭い路地裏にあるこのクラブは、毎晩活気に満ち、ボードを飛び交うコインの軽快音、伝染する仲間意識、熱の籠った会話で空気を満たしている。

ビジネスマン、店員、整備工、時には州のキャロム・チャンピオンといった男たちが、最も貴重なコインであるレッドクインを求め、ゆったりと時間を過ごす場所なのだ。

「これはコミュニティ・スポーツだよ。キャロムクラブは健全な娯楽場というだけでなく、人生の喜びや悩みを分かち合う場所でもあるんだ。私は20年前にここを立ち上げ、常連客のほとんどは子供の頃からここへ来ているし、結婚した今だって、彼らのゲームに対する情熱は強いまま変わらないね」と、フレンズクラブを主催し、エアコン完備のスペースを経営するモハマド・アフタブは言う。



モハマド・アフタブは、エアコン付きのフレンズクラブを経営している。

このクラブはこれまでの20年間営業されてきた。

アフタブは、30分のゲームで20ルピー（35円）を取っている。

「私は若者を悪習から遠ざけてきたんだよ」と、アフタブは社会奉仕活動をしているような雰囲気と言う。

彼のキャロムクラブは繁盛している。午後 8 時半、クラブはすでに満員で、多くの常連客が自分の番を待ち、外に列を作っていた。彼らの手には透明のプラスチックケースに入ったストライカーが握られている。

「すべてのバッツマン（クリケットのプレイヤー）がそうであるように、キャロムプレイヤーもお気に入りのストライカーがあるんだ」とポケットからストライカーの束を取り出し、ゲームに備えるモハマド・デニッシュは言う。

「自宅にはもっとたくさんあるけどね」と彼は誇らしげだ。

ボードの前に陣取ったモハマド・イムランは、自分はプロであり、州のチャンピオンになったこともあると言う。

「ここにいる全員が暇つぶしで遊んでいるわけじゃない。このクラブは、州や国のレベルのチャンピオンを多くの輩出してきたんだ。俺はデリーで 3 位、最近だと全インド北ゾーン・キャロム選手権で 2 位になったよ」とイムランは言う。

過去 10 年間で、キャロム愛好家によって設立されたクラブの多くが、デリー・キャロム協会に加盟し、プロ活動を支援している。

「デリーの州チャンピオンの 90% 以上はウォールシティのクラブ出身ですが、ここではまだ趣味の要素が大きいかもしれません」と、デリー・キャロム協会幹事のモハマド・シャヒッド・ファルークは言う。「ほとんどのキャロムプレイヤーが、公共企業に就職しています。だから今は多くの人々が、キャロムはより良い生活を保証してくれるものだと感じています」



オールドデリーの多くのキャロム・クラブが、デリー・キャロム協会に加盟してプロになった。

午後 10 時 30 分、近くのミルザ・クラブでは、15 人の男たちが木製ボードにかがみ込んで、ストライカーでヒットされたコインが踊るのを食い入るように見つめている。このクラブはハベリの 1 階にあるリビングで、アルシャド・ミルザが経営している。

ミルザは、ゲームのことよりもクラブの所在地について話したがっているようだ。

「この家はバダ・マカンとして知られ、この地域で一番大きな家なのさ。自分はずっとキャロムをしてきたから、子供たちを鍛えるために、ここでクラブをやるべきだと思ったんだ」と、1991 年のアーミル・カーン主演の同名映画で、クマール・サヌが歌う『Dil Hai Ke Manta Nahin』が、おんぼろの木製テーブルに置かれた埃だらけの音楽プレイヤーから流れる中、彼は言う。

誰が見たってミルザ・クラブは満足いく場所だし、一日を過ごせる場所でもある。

「オールド・デリーに住む私たちにとって、人生にとって仕事とは、それを追い求めるのではなく、ただ生きるためにするべきだと信じてるんです」と、モハマド・オワイスは自分の人生哲学を語る。彼は宝石店で働きながら、毎日夕食後に少なくとも 4 時間はクラブで過ごしている。

壁に貼られた紙には、ミルザが主催した最近の大会の優勝者の名前が記されている。壁に括り付けられた戸棚には、ルザの名前が書かれたキャロムボード型トロフィーがいくつもあ



常連客だけでなく、プロのキャロムプレイヤーもこれらのクラブで遊んでいる。その多くは、公共企業に就職している。

「デリーのキャロムオープントーナメントでは、何度もベストプレイヤーに選ばれたよ。私のクラブは社交場であると同時に、コーチング・センターでもあるんだ」

ミルザは、ボードの表面を滑らかにするため、ハウサンの粉をひとつまみ振りかけながら言う。彼の隣に座っている男性は、手帳にスコアを記入している。私たちがミルザと話をしていると、彼の隣にあるキャロムボードの周りに座っていた別の人たちが拍手をした。誰かが素晴らしいストロークを放ったのだ。

キャロムの根強い人気について、このクラブの常連でソーシャルワーカーのモハマド・アティックは、キャロムが城郭都市でこれほど人気がある理由の一つは、屋外でゲームをしようにも、どこも混雑していて、空きスペースがほとんどないからだと言っている。しかし、ファルークは、オールドデリーの高い失業率が原因だと考えている。

「数年前まで、オールドデリーのいくつかのイスラム教徒の家族は、子供たちに教育を受けさせておらず、そのため多くの若者が仕事に就くことができませんでした。彼らにとって、キャロムは最も安価な暇つぶしでした。しかし現在では、彼らの多くが教育を受け、仕事に就いています。彼らにはキャロムをプレイする時間はもうありません」と言う。

それは不思議なことでもなく、アフタブは、キャロムクラブは長くは続かないと考えている。実際ここ数年でコスモス、ニューインペリアル、ヴィーナスなど多くの有名クラブが閉店した。その数は1990年代の50軒から、この10年間で約15軒に減少している。

ナディーム・クラブの経営者でもあるファルークは、その一部が酔っ払いの乱闘やギャンブルの巣窟となり、ゲームに悪評をもたらしたと言う。

だが、プロ化したことで、クラブ文化が確実に存続して、多くのチャンピオンを輩出すると彼は感じている。

「城郭都市のキャロムは、単なるゲームから、ゲームチェンジャー（試合の流れを一気に変えてしまう活躍をする選手）になりつつあるんだよ」とアフタブは語った。

<https://www.hindustantimes.com/delhi-news/carrom-clubs-rule-old-delhi-s-pulsating-nightlife/story-sedainG6Px2Jq0g4hb466l.html>

翻訳：石川 久